

黒子ハ俗ニホクロト云フ、多ク面部ニ發スルモノ也、相者ノ方ニ黒子ノ出タル位置ニテ、吉凶ヲトスル法アリ、漢ノ高祖ハ左ノ股ニ七十二ノ黒子アリテ、七十二戰ヲ爲シ、黒子モ亦七十二戰ニ從テ消タリト史記ニ載タリ、サレバ黒子ニモ吉凶ノアルコト必定也、皮膚ニ墨ヲ點ジタル如ク平塌ニ出ルヲ常式トス、或ハ高ク突起シテ、疣目ノ如クニナルモノアリ、是ハ翻花スルコトアリ、婦人女子ノ輩モ目ノ下ニ出タルハ泣黒子也ト云テ、漫ニ藥ヲ點シ、灸ヲ炷テ翻花瘡ニナルモノアリ、謹ベキコト也、

〔和漢三才圖會人倫之用〕黒子ほくら 痣ほ 壓おさ 和名波々久曾

按、黒子多生於足爲貴徵、漢高祖左股有七十二痣、蓋黒子欲藏、生顯處者、多不佳、

集驗方云、石灰一兩、用桑灰淋汁、熬成膏、イホホコ、コフサガリヲ 疔痣、瘤贅刺、破點之、立愈、一方木灰石灰等分、以水煉之、埋糲愈黒子、

〔病名彙解〕痣 俗ニ云ホクロノコト也、黒子ト同ジ、

〔松屋筆記 五十〕足下黒子

子田○小山 左足のカ、ト内黒節の下に黒子あり、未殊なる不幸を知らず、或人云、女子陰門の邊に黒子あるもの、必後家の相也といへり、さることによ、

〔松屋筆記 六十七〕足底龜文雙痣

足の底に、龜甲の文スチ及ニツ並たる痣ホクロあるは貴相也、皇明通紀三の卷六十一に、文皇の足底龜文雙誌ありて、後貴よし見ゆ、余田○小山 足底一痣あれど、貧且賤にして、雙痣の半減の福分を得ること能はざれば、且嗟且笑、

〔東大寺正倉院文書 十一〕神龜三年 山背國愛宕郡雲上里計帳

戸主出雲臣川内、年伍拾漆歲、

正丁

鼻於黒子